

九月三十日

湖南省岳陽鹿角付近移駐

昭和二十一年

五月九日

漢口移駐

六月四日

上海移駐

八月二日

復員完結

大東亜戦争従軍懐古談

愛媛県 野田忠雄

私は昭和十二年度徴集兵です。私の軍人としての略歴は大略次のとおりです。

(一) 昭和十四年五月十日第一補充兵で善通寺輜重兵第十一連隊へ入隊、六月十日召集解除。

(二) 昭和十四年十一月三日再び善通寺へ応召し、十一月十四日香川県坂出港より乗船、中支派遣軍へ出征。支那湖北省咸寧県政府城内で第一野戦病院開設、行李班へ編入。中支派遣軍第四十師団第一野戦病院付行李班(天谷部隊高野部隊行李班)で

す。

防諜名は鯨第六八九二部隊でした。

昭和十七年十一月三日、上海呉淞第一鉄道棧橋より乗船、十一月十四日善通寺輜重兵連隊で召集解除。

(三) 最後は昭和二十年四月二十日剣山第〇〇部隊野戦病院付き行李班へ応召、九月二日召集解除復員。参加した主要作戦は三回で、

1. 宜昌作戦

2. 第一次長沙作戦

3. 第二次長沙作戦

でした。

昭和十四年五月の最初の応召のとき、住居は現在と同じで、家業は陶器、土器、土管類の製造販売。

家族は、

祖母 健在(隠居)

父母 ” ”

兄弟姉妹 ” 六人

九人で私は長男(当時二十四歳)です。

私の応召による家庭の支障困難はなく、父母は「しっかり御奉公してこい。男の名誉だ」と励ましてくれて、勇躍応召しました。

従軍中の思い出は、まず、内地のことです。普通寺の輜重兵連隊では馬がいます。朝起床すると、食事の前に厩舎へ行き、両手いっぱい藁を抱えて舎外へ出して天日に干して乾燥します。藁には昨日の馬糞の新しいのや、牝馬の出した血の交じった月のもの出しものやら、小便類と排泄物一切があります。手も服も汚れてきます。馬体の手入れもします。上等兵が「何をトロトロしているか！早く飯を食って演習の支度をせんか！」と怒鳴ります。

急いで水で手を洗い、服を掃除します。ところが時として水道が故障で水が出ないことがあります。哀れなこと、馬糞や汚物のついたままの汚れた手で、とにかく飯を食います。普通の食事ではなくて、ただもうがむしゃらに口の中へ押し込んで飲み込む、一秒でも早く。口いっぱい飯をホウ張って足には巻脚絆を巻き、軍装をしてできるだけ早く整理する。すべて二

歩以上駆け足だ。

新兵はとにかく用事が多く忙しく競争である。整理も後尾の方になるとまた別の制裁がある。以上のような日常生活に男の魂が負けて脱走兵が出る。新兵を除く全連隊の人員総動員で探す。他の中隊の者に見付け出されない内に、脱走兵の出た中隊で発見しようと懸命である。捕らえるともう、まともに見ていられないくらいに制裁で、その上、営倉入り。この悲しい経歴は一生滯つて回る。

私もつらく切ないことも多々あったが、父母の顔や励ましてくれた郷党の人を思って、どうにか乗り越えた。私の場合は補充兵で一カ月と短かったので助かった。現役入営兵の新兵は丸一カ年、次年度の新兵が来るまでは、四方八方古兵や上級者ばかりで頭は上がらない。地獄である。この訓練が精強な軍人に仕上げるのだ。一人前の男に仕上げるのである。

次に第二回目の召集です。昭和十四年十一月三日再び普通寺輜重兵連隊応召、十一月十四日坂出港出発。中文派遣軍第四十師団第一野戦病院付き行李班へ編入

されました。

坂出港を出るときは三千トンくらいの小さなボロ船に乗りました。玄界灘を通るときは、ちょうど生憎と時化で大揺れに揺られてほとんどの者が船酔いした。吐いて吐いて終わりには食べた物は全部出して、黄水を吐く始末。甲板中が白くなった。吐いた飯の米粒で、本当の話です。酔いのひどい者の中にはうわごとを言うやら、わめくやらで大変でした。

また、乗船後十日足らずの経過日数なのに虱がわきました。軍医さんものです。それ煮沸消毒だとして、皆肌着を脱いで、軍医さんの当番までが、軍医さんの肌着を持ってくる。とにかくそのとき、初めて虱というものを見て、「これが虱かヤーホー」と珍しかった。軍隊では虱はつきもの。その後虱と何回もお付き合いをしたものです。

そのうち、「海水が黄色いぞ」との声で皆甲板へ出ると、本当に青い海水が一面、味噌汁のように黄色い。揚子江（中国では長江という）の水が河口より吐き出されて、相当広い水域に拡散されているのだ。珍しかっ

た。この黄色い悪水ともその後は、毎日友達になることなど、そのときは予想もなかった。河口へ進むと左右の陸岸が遥か遠くにボンヤリとかすんで見える。その広さに感嘆する。だれかが「支那大陸は広大で、我々島国日本人の常識以上ぞ！」と言う。正にそのとおり。これより三年間従軍して湖北、湖南まで遠征したが、支那大陸全体から見れば赤ん坊の掌の中のホンの一部に過ぎない。とにかく広い所で、また見るものすべて珍しかった。

いよいよ下船上陸。第一歩は南京でした。港と城壁の中間地域に下関という兵站施設のある場所で、通過部隊として兵站宿舎に入り約十日間次の便船を待ちました。寒さが厳しくて五十年ぶりの寒波とかで、水道の水も凍りました。ようやく乗船して湖北省武昌へ上陸しました。広大な武漢大学（この場所に兵站病院が置かれていた）の立派さに目を見張り、また支那の便所の特異性（仕切りも戸もなくただ一列に長く続いたオープンなもの）には閉口したものです。

やがて咸寧へ徒歩行軍です。師団司令部のある所で、

ここへ第一野戦病院が開設された。師団長天谷閣下の訓示にも「やっと野戦病院が開設された。第一線の將兵も安心して精いっぱい戦闘ができる」とありました。

私たちの行李班には馬がつきものなので、厩舎を建てました。煉瓦が必要なので城壁をこわしては、その煉瓦を敷いた。現地徴集のラバ（ロバより大きい？）百頭ほどを収容しました。このラバは駄載用で乗馬は日本馬でした。百頭余りの馬糞も沢山出来、これを利用して夏トマトを栽培したところ、大変な豊作で、その上おいしかった、皆喜んだものだ。

この咸寧の野戦病院勤務中のこと。夜間就寝中に腹の赤いサソリに足をかまれて、毒が回って足が動かず、高熱を発して一晩中死ぬほどの苦しい思いをした。幸い場所が病院であり、手当も早く薬も注射もお手のもので、早く全快した。よかったよかったと周囲の人すべてに感謝をした。

宜昌作戦参加

宜昌とは武漢三鎮の西方直距離で約三百キロの長江

の北岸に位置する重要都市。有名な三峽の東の入口に近い。

時に昭和十五年の春。黄一色の菜種の花に覆われる中支の春である。そのころ、湖北の山野に大進攻作戦が展開された。すなわち、まず、北支軍と呼応し、信陽、確山を陥し入れて京漢線を打通した後、襄陽周辺地区において、湯恩伯の指揮する敵第五战区軍主力を捕捉殲滅し、さらに漢水を渡って長駆、宜昌を攻略、確保せんとするもので、第三、第十三、第三十九の各師団を中核とし、さらに第六、第四十の各師団や多数の独立混成旅団が参加して、約三カ月を費やし、雄大なこと武漢攻略戦に次ぐといわれるものであった。

昭和十五年四月十二日、第四十師団では、歩兵旅団長石本少将の指揮する石本支隊が編成され（二三四一の一個中隊、二三五一の主力、二三六一の第三大隊）、湖北の戦線に奮戦した。その間に多数の將兵の損害を出したが、戦果また大なるものがあつた。五月十七日加川中佐を長とする加川支隊が出発、二三四歩兵連隊の第二大隊及び山砲一個中隊を掌握し、京漢線を北上

進攻。その間敵第二十九集團軍の大部隊の包囲を受け、三日間にわたり苦闘を続け、友軍輸送機による弾薬・糧秣の補給を受けること数回、よく強敵を撃破した。

私も野戦病院行李班ではこの作戦に参加した。勿論私どもは初陣であるが、精強を誇る経験豊かな上官を信頼し、指導され苦戦ではあったが任務をよく果たした。こんなことがあった。夜半の二時ころ、「今持っている飯は直ちに食べて、新しく二食分を炊き、直ちに出発前進」はよいが、朝になると真夏の太陽がギラギラと照りつけて暑くてかなわん。休止になると、馬の腹の下の狭い日陰へ走り込む。夜営地へ着いて、クリークの水で炊飯するが、夜が明けて見ると、クリークの中には死体が山と浮いている。「あつ、この水で炊飯して食べたのか」と仰天した。また敵地の奥深く進攻していったとき、住民はすべて逃げて残っていないのに、オギャーオギャーと赤児の泣き声がする。その声を求めて行くと、狂気の若い母親が虚ろな眼で今生まれたばかりの赤児を抱いている。赤児の泣き声だけが高い。正に戦乱の犠牲の最たるもの。また、友軍

の行進する隊列の付近を、母親が行方不明のわが子を求めて右往左往している。戦場で若い女が殺気立っている兵士の目に止まれば、暴行虐殺の危険は多いこと。それなのに子を求めてさまよい歩く強い母の悲しい姿。あの女たちは、その子たちはその後どうなったであろうか。

私の部隊は野戦病院行李班であるから、直接戦闘には用がないとはいえ、敵より狙撃されて、チェッコ銃の銃弾がアスプスと足下へ土煙を立てて着弾することもあった。思わず鉄胃の紐を引き締めて、匍匐前進に移ったこともあったりで、やはり戦場では一瞬の油断もできぬと今もって痛感させられている。運悪く流れ弾に頭部貫通されて、アツと言う間に戦死した話をよく聞かされた。

またこの作戦では夜行軍も多くあった。複数の部隊が行進する場合、道路を並行しておれば問題はないが、交差して行進したときは困る。九州弁で「お前らは俺たちの隊の行進を邪魔するか」と叫んで、ごぼう剣を抜いて斬りつけてくることがあった。暗夜に一度隊列

が切れると、電灯、照明、標識は一切なく、道らしい道はほとんどない。前の人と紐を結んだりしている状態もあるくらい暗いから、もう処置なし。夜行軍はこちらの企図を秘匿する必要上音を出さぬ、声もごく小さい声で小範圍しか分からねこと故、大声で呼び合うなんてことは駄目。とにかく隊列が切れると非常に困り爾後の行動ができぬ。

また、隊には馬がいる。駄馬であるが夜行軍中に、馬の「尻がい」が外れてなくなることもあった。班長は「落としたら拾ってこい。尻がいも兵器ぞ」なんて怒る。けれども暗夜に、一人二人で探しに戻るともう結果は見え透いている。残敵や便衣隊住民に捕まったり虐殺されるのみ。どうして尻がいを探しに行けようか。命令を無視するしかない。たかが馬の尻がい一個か、又はわずか一錢五厘のハガキ一枚で召集される兵隊とはいえ、こちらは人間である。もうどうでもなれである。

とにかく宜昌作戦は苦戦が多く、友軍の損害が多い。日本空軍がその当時は優勢で制空権はこちらにあった

からよかった。空軍に助けられたことも再三のこと。味方の損害が多いと、病院も多忙である。ある軍医さんは気軽に「商売、商売」と口走りながら患者の手当に精出していたのを有り難いと思ひ出す。敵地は地雷を埋めてある。前の者の足跡を踏んで行かぬと危ない。馬が地雷にやられて腹が裂けて腸が出て苦しむのも見た。馬とは言え、日夜苦楽を共にする仲間である。痛ましくてかわいそうである。

やっと作戦が終わり漢口へ帰った。軍装は破れて腐り放題。乞食よりもひどい。敗残兵と思われるかもしれない。漢口には外国人の租界があった。高い建物の窓から見下ろしていた。どんなに思っていたらうか。どうにか原駐屯地へ帰り着いて、身の手入れ、被服の支給等々をしてやっと人間らしくなった。

この作戦中、私も論功行賞に浴し、勲八等の瑞宝章と従軍徽章を下付された。松山市の留守宅へではあったが。

戦闘をすると、敵味方の人馬が死ぬ。戦場掃除という仕事がある。暑い夏のこと故、腐敗が早い。人馬の

死体が膨れる。目、耳、鼻、口と穴という穴からうじ虫が出入りする。臭い。生き物のはかなさ、無残さをいやというほど味わいました。殺し合いは無くなれ。夜戦友と語る。「戦場は日本でなくて良かったのー」と。

第一次長沙作戦参加

昭和十六年九月、猛暑なお去りやらぬ湖南の山野に戦雲たなびき、薛岳せつかくの指揮する敵第九戦正軍の本拠、長沙に向かう進行作戦が準備された。当時、軍は独ソ開戦の新事態に対処するため、いわゆる「関特演」を発動、約八十万人の兵力を大動員し、ぞくぞく満州に集結しつつあったが、必然的に世界の耳目が、ソ満国境に集中するおそれがあるので、これが偽驕、牽制を図るとともに、蒋介石軍の主力に一大鉄槌を加え、軍政両面における中南支きっての要衝、長沙をあわよくば我が手に収めんとして、本作戰を計画、第十一軍（軍司令官阿南惟幾中将）隷下の第三、第四、第六、第十三、第三十四、第三十九、第四十の七個師団と混成一個旅団が参加したものであった。

久しぶりの作戦に将兵の意気は高く、戦わずして既に敵をのむ概のあった各師団は、怒涛の進撃を開始し、たちまち長沙城内に突入、その一角を占領したが、敵は得意の退却誘引戦法を用い、我が方の進撃が止まると大兵力が群がり来たり、甚大な損害を生じ苦戦に陥った。よって長沙の確保は困難と判断した軍は、反転を開始し、十一月初旬、ようやく我が警備地内への撤退を終わったが、地形的、補給的に、すこぶる難戦をきわめたものであった。

我が第四十師団も善戦健闘し、第十一軍に第四十師団ありとの武名をあげることができた。師団長天谷中将も足を負傷され、戸板に乗って指揮をとるのを目撃した。一般の戦闘部隊の損害もあり我々病院も忙しかった。三八式歩兵銃（血がついて汚れていた）を五挺ずつを束にしてくり、馬の背へ載せて運んだりした。

行軍の途中住民の残っていない部落を通る際、鶏を見付けて捕らえ、御馳走にありついたりした。また後続部隊が小高い場所での防備も警戒もせず、友軍の決死の死闘場面を、高見の見物中、その丸く車座をし

て食事をしていた一隊の真ん中へ、不意に敵の迫撃砲が落下爆発。一瞬にして全員跡形もなく吹っ飛んで生存者なし、なんと痛ましい戦訓もあつた。

第二次長沙作戦参加

昭和十六年十二月八日早朝、「帝國陸海軍は、本八日未明、西南太平洋において、米英両国と戦闘状態に入れり」との大本営発表があり、ついで真珠湾攻撃の大戦果が、将兵の耳を驚かした。対米英宣戦と同時に、南支軍主力は香港島の攻撃を開始したが、その背後を脅かす蒋介石軍主力を北方より牽制するため、第十一軍司令官阿南中将は、再び長沙進攻作戦を計画し、第三、第六、第四十（師団長青木成一中将）の各師団と独混第九旅団が参加した。

第一次長沙作戦が終わって、わずか一カ月余にしかならず、しかも兵力は前回の半分に過ぎなかったが、いづれも在支師団きつての精銳部隊、疲労いまだ抜け切らずとはいえ、復讐の意気に燃える將兵は、思いを南方の戦線に馳せつつ、第一飛行集團の援護、協力の下に先を争って南下して行った。

霜凍る昭和十七年の元日を迎え、香港上陸のニューズに、士氣大いに上った各部隊は、さらに所在の敵有力部隊を破摧した。

ついで第四十師団の一部は、大山塘付近に陣地を占領確保し、長沙に突進した軍主力の左側を援護すべく下命され、連日優勢なる敵の執拗極まる猛攻を受け、第二三六歩兵連隊第二大隊長以下三九一名の死傷者を出したが、よく団結の威力を発揮して、ことごとくこの敵を撃退し、死闘よく任務を完うして軍主力の反転を容易ならしめたのであつた。

もともとこの作戦は、広東にある第二十三軍の援護が目的であり、南支方面の支那軍を吸収すれば足るのであつた。従つて、ある地点からの反転は、予め想定されていたのであるが、並列した第三、第六兩師団の競争意識は、先陣争いとなって軍の制止もきかず、元旦にはたちまち長沙の一角に突入してしまつたものといわれ、かえって待ち構えた敵の誘引撃破戦法の好餌となつた感があつた。

しかも、第一次長沙作戦での相当の打撃を受け、減

勢していると判断された支那軍が、意外にも優勢で、長沙にあった第十、第二十、第三十七、第九十九の四個軍のほか、第三戦区の第二十六、第七十三、第六戦区の第四、第七十四、第七十九の五個軍、さらに撈刀河方面から三個軍が来援し、その総兵力五十万人余といわれた。

長沙に突入した我が軍は、猛烈な市街戦の末、その半分を占領したが、敵の抵抗は次第に激しさを加え、我が損害は続出するにいたったので、一月五日より撤退を開始したが、敵の反撃追尾はきわめて執拗かつ鋭く、並行して後退する各師団は、しばしば脱出困難に陥り、その都度他の師団は回れ右、救援を命ぜられるのであった。

厳寒に加え、食糧、弾薬ともに不足し、わずかにイモをかじりつつ進む將兵の辛苦は筆舌に尽くし難く、
『第二次長沙』の一語は、苦しかった戦いの代名詞として、この作戦に参加した者の語り草となって、今なお残っているほどである。

とくに第二三六歩兵連隊である亀川連隊主力の大山

塘における戦闘は、まことに凄惨をきわめ、連隊本部勤務員も第一線に増加され、山上において機関銃を敵と奪いあうなど緊迫した光景が、随所に見られたのであった。本作戦における戦死者の中に、大隊長一、中隊長四、大隊副官一を含む將校十一名を数えたことは、この作戦のすべてを物語っているといえます。

野田忠雄個人としても、この第二次長沙作戦は忌まわしい作戦でありました。作戦期間は昭和十六年十二月二十四日より昭和十七年一月二十三日までといわれております。私は戦友とともに病院を出発し長沙へと進攻中、桃源においてA型パラチフスに罹り四〇度の発熱となり、リングル注射などを受けて約七十日間入院をしました。

最初、部隊長の松山少佐が診察して「お前は元氣者だからそのまま行け」といっていたが、見習士官の専門医が診て「これはいかん、早く原隊へ帰れ」というので、作戦途中から五、六人で約五千枚の毛布（患者用で不要となり）の宰領をして、列車（といっても車の床に馬と同じように寝ワラを敷いて病臥する程度）

で感寧に戻り入院しました。

伝染病室にいる間、沢山の人が病死しました。朝患者を裸にして、脱脂綿とアルコールで体を拭いてやっているのをよく見ました。また解剖室で軍医が死体を解剖し腸を出し、悪い部分を切り取って開き、顕微鏡で研究勉強している熱心な場面も見ました。

ここで苦しかったことはリンゲル注射である。二〇〇ccの液を大腿部の静脈へ注入するのだが、熟練者の看護婦さんでなくて、衛生兵殿がしてくれるのである。彼らも一生懸命に親身に世話してくれるのだから文句は言えないが、何様入隊するまでは、百姓で田畑を耕したり、漁師で船に乗って魚を釣ったりしていた人々である。急に注射器を持たせても初めから上手にやるはずがない。何回も針を入れ直しても、うまく血管へ入らぬので、内股は内出血で黒く腫れ上がり痛いこと。「文句をいわんで辛抱せい」と叱るけど、こちらはたまらない。勿論、治療をもらうのだから、感謝をせねばならぬが、それにしても難儀なことであった。

また、感心させられたことは、衛生兵が下痢患者の下痢便を両手で受けてやり、自分の身に便が飛び散るのも省みず、本当にもう親身以上に看護している姿には、ただもう頭が下がるのみ。伝染病といえ、肉親でも側へ近寄らぬのに。

嫌なことでは、衛生兵が患者に間違った薬を飲ませたこと、患者が衛生兵にビンタしていることもあった。入院中の思い出として最後にもう一つ。何しろチーフで入院だから食事の制限は大層きびしい。快方に向かうと若い兵隊ばかりのこと。消灯後おそくまで「あー、餅が食べたい。ハマチの刺身が欲しい。アレがコレが食べたい」とワイワイガヤガヤ毎晩のこと。何といっても独身の若者ばかりのこと故、色気より専ら食い気が旺盛で、昼寝するから夜はなかなか寝付きが悪かった。

時として友軍の死体を焼く隠亡を下命されて(宜昌作戦中のこと)、計二回やりました。嫌な臭い、目をそむける死体、あれは思い出すだけでもご免である。しかし、人間は鍛えられるとまた不屈さを加えるもの

か、われわれは、死体を焼いた後の残り火で芋を焼いて食べたりました。

最後に昭和二十年四月二十日、剣山第〇〇部隊野戦病院付き行李班へ応召し、高知県幡多郡中村町秋田の民間農家の養蚕室へ一個班ずつ分宿した。善通寺より列車輸送で宇和島、芳野生を経て、四万十川を下り中村町（現在の中村市）へ行った。八月十日ころのことか、夜間慰安行事で映画を見ている密集部隊の中へ、敵米空軍の爆撃を受けて二百人ほどの兵員が死傷した事件があった。これは多分、日本内地である高知県での事件としては最大のことのようにです。死体を棺桶へ納めて、寺へ安置したものの引き取り人はなく、夏の暑い季節のことでもあり腐敗が早くウジ虫が湧く、悪臭がきついで困りました。

やがて負傷者を松山の衛戍病院へ引率護送し、各人の装具を持って中村町の原隊へ帰り、九月二日召集解除復員しました。

中支の鯨兵団在隊中は衛兵勤務、不寝番、厩舎司番その他各種の勤務、使役等と、一般陸軍兵上として平

均的な生活は一通り経験したと思います。

A型パラチフスにやられたときは、運よく見習士官（とはいえ地方では偉いお医者とのこと）が助言と温かい配慮で助けてくれた。今でも感謝している。咸寧ではA型パラチフスで大勢死亡しました。私は幸せでした。

郷里の松山へ無事帰宅しました。その当時、母は婦人会の世話をしたり、父も元気で家業に精出していた。ただ妹一人死んでいたが、そんな状態で我が家の生活もまあまあで、何よりのことであつた。

私は病気になつたり、戦場で思いもかけぬ労苦を体験したり、青春時代をよく頑張つて生き残り、元気で生還したことを大きな自信として戦後の生活の心の支えとしてきました。また不幸にも敵弾や病魔に倒れて、若い命を大陸の土と化した英霊に、心からの追悼と冥福をお祈りせずにはおられません。

現在は妻と二人の息子、孫五人という状況で、働くのみ、借財もなし、無理な欲望はなし、平凡な普通の幸せで、毎日感謝して明け暮れています。